

われ、ひとと共に繁栄せん

1

山岸巳代蔵の考えを基とする山岸会が生れたのは、昭和二十八年三月十六日のことである。この日、京都は向日町の林田定三宅に發起人二十数名が集まり、最初から一定の会旨を持った公的な団体として発足することになった。当日の結成式に集まった人々は、山岸巳代蔵はむろんのこと、この数年、山岸に教えを請うてきた和田義一、藤田菊次郎、林田定三、伊藤正一、山下照太郎らであった。

この年山岸巳代蔵は、すでに五十路の坂を二つ越している。とすると、十九歳の啓示の年から勘定してどうに一世代以上経ているわけである。一つのほんものの鉅脈が掘り出され、定着するためには、何と長い年月が費されるものかと感入の念に打たれざるをえない。当人に見れば、その間何を考え、行おうと、いわば雌伏の期間ということになるのであり、並大抵の神経では絶望に陥らざるをえないはずのものである。

ところが、山岸ばかりはそうでなかった。その根本理由は先にいう彼の「戯れ」の人生態度そのものにあると思われるが、自分の胸にある理想社会実現の射程距離を二百年以内と踏んでいたことにもよる。自分の生きている間はどうにもならない、世間も理解してくれはしまいとてんから諦めてい

た。明晰な予見的判断そのものが、彼の余裕ある人生態度を裏づけていたのである。

そうした見方からすれば、むしろ昭和二十八年の会結成は理想社会実現のためには早すぎたかもしれない。しかし早かろうと遅かろうと、チャンスが訪れた以上迅速にそれを掴まえて行動を起こさねばならない。山岸は臥龍三十余年にして、ようやく雄飛の時至るの想いに胸を高鳴らせていた。

以後、山岸は観照的思索人から運動的革命家としての自己を迎え、屋内から屋外へと生活の場を移すわけであるが、会結成の道程について、少しく述べておくべきであろう。

例によって詳しい動向は判りかねるのであるが、戦争下一切の世間的雑事から身を引いた山岸は、敗戦後にあっても数年間は同じ姿勢を保っていたものらしい。この間、多分山岸はかつて養鶏で儲けた多額の預金で居食を続けていたものと推測される。しかし日毎に燃え上がる戦後のインフレ事情によって、忽ち一家の生計が問題となる。

そこで、心ならずも山岸は昭和二十四年に自活農業を始めるのであるが、研究熱心な山岸のことでじきに野菜づくり、稲づくりの名手となる。その農作の見事さに通りすがりの人々は立ち止まって眺めていたそうである。

こうして生れて初めての鋤をにぎる百姓生活は、山岸会誕生までの五年間続くのであるが、米づくり未だ二年目にしてその成果を試される試練の時を迎えた。

それは今でも関西人の間では語り種になっている昭和二十五年九月三日のジェーン台風のことであるが、何しろそれより十年前の第一室戸台風にも匹敵する大台風だったので、周辺農家は甚大な被害を受けた。稲は早いものは出穂を始める大事な時で、中には秋の収穫が皆無に近いものもあった。

ことに山岸が住まいしていた向島の辺りは、その昔桃山城出城の堀の跡で、家の裏には藻の茂った

五反ばかりの池があり、その南は干拓地として広がっていたが、この猛台風によって一面の倒伏田となった。干拓地は肥沃な上に、当時は肥料の出まわりが逼迫していて、百姓は多く市街地の下肥を主要肥料として施していたので、稲は窒素過多で草丈が高く、かつ軟弱だったせいによる。

ところがこの惨状の中にあつて、当時京都府の農業普及員としてこの地区を担当していた和田義一が、驚くべき事実を発見した。それは台風被害の実地踏査をして歩いていたことであるが、実に珍しく、一望ただの倒伏田の中にあつて一区画だけ稲が見事に立ちそろっていたことである。しかもその尖端には瑞穂がふさふさと出そろっている。驚いて人に尋ねると、それは山岸の自作の田圃であつた。名前を聞くや和田は、早速山岸の家を訪れた。当時はまだ戦後の食糧難の時代でもあつたが、人一倍研究熱心な和田はこの驚異的な事実を知って矢も楯もたまず、この米づくりの主に対面したかったのである。

和田は山岸と会って一目でその人柄に魅かれ、農業経営の画期的であることを感歎させられた。その説明するところによると、どうやら米づくりの秘密は鶏糞にあるようで、山岸は米—鶏—土—米の循環農法を説いたのである。丈夫な稲づくりのためには、何よりもいい土づくりが必要である。そしていい土づくりのためには鶏糞をやるのがよいということだった。

稲田に鶏糞をやると窒素が多くてできすぎるが、一度麦をつくって窒素肥料を吸収させてその後につくとよくできる。遅効肥料だからすぐにはきかないが、金肥（化学肥料）と違って三要素揃っているのでもいい肥料になる。とすると農家は鶏を飼わねばならないということになるのであるが、これがまたべらぼうに手間のかからない飼ひ方がある上に、飼料というものがいらぬ。飼料は選米した後のくず米をやっておけば充分であつた。くず米で足りぬ分は草を刈って与えればいいのである。

もっともこのやり方だと、鶏を飼うのに限度がある。田圃で必要とする肥料の量と、鶏が必要とする飼料の量との間で、相関的に羽数が決まってくる。それが一反歩で十羽（二町歩で百羽）ということになり、この農業と養鶏との相互扶助的作業を「農業養鶏」とした。こうした従来の副業的でない養鶏一体の経営法の結果が、見事な実を結んだのである。

聞いていて農業普及員の和田は、すっかり感歎してしまった。彼とても農業技術員である以上、田に鶏糞のいいことはわかつているが、それを養鶏との関係の中で考えることはできなかった。稲と鶏との間にそれほどいい関係が成り立つとは思ってもみなかった。しかも驚くべきはその養鶏法であつて、山岸のそれは従来に比して革命的ともいえるほどの養鶏法だったのである。

何しろ、生れたばかりのか弱い雛を小米の山に放っておけ、糞は掻くことはないの、電熱暖房はいらないの、給餌は一日一回やるだけでいいのと、まるで聞いたことも見たこともないようなやり方ばかり聞かされるのである。まさに青天の霹靂の思いをさせられる話ばかりである。因みに当時雛は胃が弱いのでなるべく紛餌を与えるようにとされていたし、日本一の養鶏家とされる高橋宏治は給餌は一日八回としていたのである。

しかしこのおよそ常識はずれの養鶏法も、その実践結果の説明を聞いていると一々合理的でうなづけることばかりである。ここにおいて和田義一は、その任務からいってもこれほどの技術を放っておく手はないと痛感し、山岸を世に出すべく努めた。心進まぬ山岸をむりやり口説いて、講演会等につばり出したのである。これがいわば山岸已代蔵が世に出る糸口となった。

もっとも山岸の技術の優秀さを認めたのは和田であつたにしろ、その宣伝普及に大いに役立ったのは当時刊行されていた「愛農会」の新聞・雑誌によってである。「愛農会」というのは主宰者がキリ

スト教徒で、記事も救世の趣のある真面目な内容のものが多く農業団体であったが、ここで新技術紹介として山岸養鶏法が全国に紹介された。

折しも日本の農業は早くも行き詰まりの兆しを見せだし、盛んに副業が求められている時期だったので農家は養鶏に強い関心を示した。農協でも養鶏を奨励し、農家によつては養鶏に大規模な投資を試みたりしていた。しかし素人の百姓がそう簡単に鶏が飼えるわけがない。大体鶏というのは神経質で、一度驚かせると一〇パーセント産卵率が落ちるといふくらい飼ひ方が難しい家畜である。

そのために鶏を飼う大方は失敗し、時に電熱暖房によつて家まで焼いたりして、まるで鶏に翻弄されているような具合であった。

そんな時に前述したように、電熱は使わず、踏みみ藁の醗酵熱利用で失火の心配は絶対なく、スバルタ式の育雛法でひよこは百パーセント丈夫に育ち（大抵一割は死ぬものである）、水は不断給水で一回もとにかえず、甘薯類は煮ず切らずでそのまま与え（中をきれいにくりぬいてたべる）、糞も堆積して施肥の際以外にはとらなくともいい（糞は殆ど無臭に近い）などという革命的養鶏法が知らされたのだから、全国養鶏家が驚いたのもむりはない。

山岸は四六時中鶏の世話をやいて、しかも産卵率がおもわしくないという養鶏家に相談を受けると、それには直接答えることなく「あんた方夫婦して久し振りに一週間ほど旅行して楽しんできたらどや」とすすめた。それを聞いて生き物を放つておいて旅行などんでもない、と気色ばむものが大半であったが、それでもためしに数日でも家を空けて帰宅した人は、意外にも、鶏の産卵率は以前に比して上がっていることを発見した。

これをもつて山岸式養鶏を世間では、一名「なまくら養鶏」と呼んだのである。

むろん最初はなかなか人も信用してくれなかった。しかし山岸のいう通りに実践したものは、必ず良好な成績を上げた。山岸の養鶏法は、農業養鶏に関する限り、どんな素人にも使える完全な「道具」にまで仕上がっていたのだ。

大阪の枚方市の川越農協での実験結果もそうである。この農協では大々的に会員に養鶏をとり入れようというので、山下孵化場主に相談して山岸已代蔵にきてもらい、養鶏技術の講義を受けることになった。会場は枚方市の公会堂で、百人あまりの組合員が集まって話を聞いたのであるが、話のすむにつれて農協の技術員は慌てだした。何しろ、未だかつて聞いたこともない方法である。技術員は山岸を連れてきた山下をひじでつついて、「あんなことで果して、鶏が育つのか」と小声でなじっていたのである。

ところが当の技術員が、「私が責任者だからまず私がやってみないことには組合員にすすめてやらせるわけにはゆかない」と雄辯五十羽をためしに山岸式でやってみると、予想に反して素晴らしい成果を得た。すぐロックホーンの正逆交配雛あわせて三千羽を注文して、会員に配分した。枚方市はこの好成績に意気込んで、翌二十八年には三百人もの人を集めて第二回山岸講演会を開き、雛も一躍一万一千羽入れることにした。

こうして山岸養鶏が知られると、個人的に山岸の家を訪れる人もでてきた。その中でことに熱心だったのは、後に会が発足して自宅に本部事務所を構えることになった向日町の藤田菊次郎ら三人であったが、彼らは二十七年正月に初めて山岸の話を聞いて直ちに共鳴した。そこで三月になって藤田の門先に山岸式の鶏舎を建て、共同出資で二百羽の雛を飼うことにした。藤田は当時を回想して「文字通り研鑽会の日々でしたよ」という。

研鑽会というのは後に説明するが、これなくしては山岸ズムも成り立たないといわれるくらい大事なもので、簡単にいえば全員一致に至るための寄り合いである。この研鑽会の草分けが藤田ら三人であった。革命養鶏のことだから一切が五里霧中、聞いてきたことを話しても各々が違っている。そこで何とか一致点に達しようと話を進める。行き詰まると三人で、またして山岸家を訪ねた。

向日町から山岸の住む向島までは六キロ余、冬になれば吹きざらしの寒い田圃道を自転車で行き、雪の日には歩いて通ったこともある。しかもそれは仕事が終わって夜の通いである。しかし想って通えば千里も一里とか、彼らは冬の間に数十回も通いつめたそうである。

そしてその結果、その年の秋には見事に揃った二百羽の若鶏が次々と黄金の卵を生み出したが、ある日、百姓仕事に忙しい山岸を訪ねると、日頃おとなしい山岸に「人の迷惑も考えずに昼の日に自分のために来るのはどうだか」と嫌みをいわれた。

藤田にはこれがこたえたらしい。何のために、誰のためにこんなにしてまで鶏を飼わねばならないのか。もう一度初心に戻って考えてみねばならぬことだった。

どうしたらよいだろうか？ 三人は真剣に考えた結果、二十七年暮に至ってこの養鶏を全国に普及するための会をつくるに限る、そうすれば山岸さんも数えにきて下さるだろうし、この養鶏の将来も実に明るいものとなる、そう結論したのである。

それでこの話を和田義一に持ちかけると、和田も同じ思いと悩みを抱いていたのですぐさま賛成し、山岸にその旨を伝えた。するとこれまで一度も進んで向日町へくることのなかった山岸が、話のあったあくる日に古びた婦人用の自転車に乗ってやってきた。そして、どうやら会の設立には賛成の意志を表明して帰っていったのである。藤田らは山岸がなぜ一朝にして豹変したのか不思議に思い

つつも、ともかく会の設立を決めたのだから直ちに企画を立て、実行に移すことになった。問題は山積みしている。第一に発起人を誰にするか、会の目的、機構、組織を如何にするか、また結成後の活動や普及の仕方をどうするか等々。これらの問題を結論するのに、彼らは我を忘れて熱心に話しあい、必要な仕事のために動き廻った。

山岸の向日町訪問は二十八年一月の半ば頃、それから会発足までの二ヵ月の間に準備会は場所を変えて実に三十九回もたれた。

新しい養鶏を普及する会であるから、名前も創始者の姓をとって、「山岸式養鶏普及会」と衆議一決したところで、当の山岸が特に重大な提案があるから聞いてくれというのである。

山岸已代蔵とすれば、いうまでもなく、理想社会実現のことがあった。理想社会の理想を幸福ともいいかえている。単に幸福といってもそれは不幸の対語としての幸福ではなく、つまり、いつ不幸に転換するかもしれないあやふやな幸福ではなく、幸福でしかない幸福、「絶対幸福」の幸福社会を求めてきた。

生命を失うことは、少しも惜しいとは思わなかった。山岸は旅の途次、墓石をみつけたりと、「楽なな、楽なな」と誰にいうともなくつぶやいていたそうであるが、彼の心中にはむしろ死に憧れている面があった。事にぶつかって方法に依れば必ず達成できるの信念もあったが、他方ではつい「ええい、こんな人生面倒くさい、死んでやろか」の気持ちに動く人だったようである。

それが今日まで生き延びてこれたのも、一重に幸福社会実現の想いがあったればこそである。山岸は「私人」「公人」といういい方をするが、公人としての私がそれを容易に許さないのである。山岸は「私人」「公人」といういい方をするが、公人としての私があればこそ、養鶏もやってこれたのだらう。そしてその公人としての私があればこそ、養鶏もやってこれた。

農業と養鶏を結びつけて合理化したのも、あまりにも惨めな日本の百姓をみてのことである。朝は朝星、夕べは夕星を頭上にいただいて働きづめに働く日本の百姓をみて、何とかもっと省力化して、自身の幸福の時間が得られるような農法はないものかと、種々試みた結果が農業養鶏であった。むしろ農作自体にも多くの画期的方法を試みている。(例えば水田の草とり、麦踏み等不要としている)

究極の目的は人間の幸福であって、養鶏や農業はあくまで生活を維持するための手段に過ぎない。手段と目的とが転倒して、養鶏と農業が目的的になってはならない。

大体養鶏となれば直接技術だけ云々しても仕方ないので、経営の面がより大事である。技術的にマスターできても、経営がわからないから、素人は大抵失敗する。しかも技術、経営ともに人間が考え、使用するものであるから、山岸養鶏にとっては一番基をなすものは精神である。精神(即人間)あつての技術であり、経営であり、両者は相関関係にある。したがって山岸は鶏舎をみて、その飼主を判断し行末を予測することができた。

ある日、団体で某養鶏場を見学に行ったときのこと、山岸は飼主の言を聞くこともなく一人鶏舎内を調べて、帰りしなに「あの鶏屋はつぶれるでエ」といった。聞いた当人は内心「あんなにやつてるものがまさか……」と思つていたところ、間もなく本当にその養鶏場は倒産して廃業したという。人間と技術と関わりあうことかくのごとしである。

山岸はこれを定式に表わして、(技術20+経営30)×精神50=山岸式養鶏とした。技術は全体の僅か二千五百分の二十しか占めていないのである。

そして精神とは何かといえば、人間であると同時に思想であり、理想である。思想と理想なくして山岸養鶏は成り立たない。その意味では山岸養鶏は鶏であつて、鶏でない。思想(理想)と養鶏と

は、あたかも農業と養鶏とが密接不離の関係にあるごとく、組み合わさっているものであり、山岸養鶏を仔細にみるならば、その思想(理想)のすべてが組み込まれていることがわかるはずである。

「本当は鶏も含めた根本的で、不可欠な大事なものと私は考えるのだが……」

全国的規模の山岸養鶏法普及の会をつくるべく、昼夜を分かたず意気込んできた和田、藤田らは、山岸のおよそこのような話を聞いてウンもスンもなかった。以前から山岸の養鶏には、単に技術にとどまらない深いものがあると思つていたので。むしろその根のところを聞き出したい気持があつての会である。是非その大事を明示してくれと一同強く要請すると、山岸はあらかじめ用意してきた現在の山岸会の成案文(概要)を示した。

山岸会

趣旨

自然と人為、即ち天・地・人の調和をはかり、豊富な物資と、健康と、親愛の情に充つる、安定した、快適な社会を、人類に齎すことを趣旨とする。

一、方法

本会の趣旨を実現するために、全世界の頭脳・技術を集合する研究機会を設け、それを実践する。

二、方向

(1)物理・化学・科学／心理・哲学・宗教学・文学／技術・芸術／産業・交流其の他及び社会・政治総てに携わる学者、実家に、各々の持ち場に専念し得るような環境を造り

- (2) 学問と実験を基として、凡ゆる物資を空気・水の如くに容易に使用し得るよう、豊富に生産し
- (3) 物資の豊富により、物の争奪の世界を無くし
- (4) 学問と実験を基として体質を改造し、疾病を排除し、外観実質共に優秀なる子孫が生れ
- (5) 自己の延長である同属子孫の幸福と繁栄を招来せん、との目標を同じくする全世界の人類間に、提携と同属愛の優美な心境を造り
- (6) 物心両面共に他を侵す必要なき、協力社会を指向する。

断っておかねばならないが、これは山岸個人の描いた会の概要（検討資料）であって、一般に考えられるような「規約」「規則」といったものではない。そんな約束事を無視しているところに、むしろ特徴があるのである。さらに、この時同時に提したと思われるが、全体の主旨を一目で理解できるように現わした標語（スローガン）があり、それには短い説明文が付してあった。これが今も山岸会会員たちが、常々口にしている「会旨」である。

山岸会会旨

われ、ひとと共に繁栄せん

私達は諸事を行なうに当り、その正確さを期するために、その判定に、この会旨をもってします。

その思いを為すことが果して終局に於て、自己を含めた社会の永遠の幸福、繁栄に、資するものであるか、どうかを検討し、一次的（自己一代、及び自己の周囲のみ）目前の結果にとらわれないように心して居ります。

山岸の説明を聞いていた和田らは、一方では山岸の考えのいかにも大がかりであることに驚き、他方では深い意味はわからなくとも、「われ、ひとと共に繁栄せん」というのであるから、容易に共鳴共感し、では是非普及会と同時に並列的に「会旨」を土台とする会を興そうということになった。その会の名前も藤田によって、「山岸会」と名づけられ、ここに歴史的な「山岸会」並びに「山岸式養鶏普及会」が同時に発足することになったのである。

2

ここで山岸会の概要はさておき、「会旨」の内容を少しみておくと、その標語は「われ、ひとと共に繁栄せん」というのであるから、これ以上に平たい表現はあり得ないほどに、俗耳に入り易い文言である。だがいざ本気になってみると、その思想的背景は大変深く、その生活的行動において実に難しいことが理解されるはずである。

そのことの一端をやはり山岸自身の生活に拾ってみよう。福里二ワが初めて京都の寺院で山岸会の「特講」（特別講習研鑽会）を受けて、山岸已代蔵なる人物に相まみえた時のことであるが、彼の周りに虻がぶんぶんうるさく飛んでいた。いうまでもなく虻は人を刺す。みていると、山岸はそれをすつと掌につかまえ、縁側にゆき、ふわつと掌を開いて宙に放してやった。二ワは不思議なことをする人だなあ、と思ってみていたという。

また結婚してからのことであるが、一日、山岸はガラス棒状になった柄の長い蠅取器で蠅をとって

いた。ところが蠅をとり終るや、山岸は蠅取器を庭に携えていって、生きているものは宙に放してやり、死んだものは蠅の巣を探してそこにポロポロ落としていた。

また、ある人が山岸に頼まれて、山芋を買ってきたことがある。むろん食するためである。その山芋を、彼は芽の出る先端の細い所をボキンと折り、庭の土中に埋め、あとは土のついたままオロシ金でおろして、そのまま飲んでしまった。

山岸のこのような生活的逸話は、まだ他にもいくらかあるのである。例えばみかん、りんごを果物店で買う時も、わざわざ熟れ過ぎたり、見栄えの悪いくず物を選んで買ったりする。何でそんなことをするのか、周囲のものにはなかなか心中が計れなかった。

いわばこの謎を解くことは、一つの事がわかれば案外容易なのであって、これがそもそも「われ、ひとと共に繁栄せん」に關つていた。つまり「われ、ひとと共に繁栄せん」とはいいかえれば、「共存共栄」ということである。山岸は自然界の一切は「共存共栄」の世界とみなしている。一つとして、それ自身で単独であるものはない。一見単独にあるようにみえるものでも、よく観察すれば必ず相互依存によって成り立っている。しかもそれは広い原野にあつてもそうだし、ごく局部的小域にあつても同じことである。

例えば牛の胃袋の内部には無数の雑菌（微生物）が住まいしている。常識的にはこんなものは殺さねばならないわけであるが、実際には雑菌と牛とは相互共存關係にあり、牛が飼料を食べると、雑菌は環境に育まれてどんどん増殖するが、それとともに牛の第四胃から分泌される消化酵素によって、雑菌は溶かされ、腸から体内に吸収されて牛の血肉となる。雑菌は蛋白質であるから、牛の大事な栄養になるのだ。

自然界のすべてが「共存共栄」にして、かつ「共生共活」（活かし合う）關係にあり、それは仮に殺し合いの關係にあつても、結果として互いの種を保存し合う關係にある。

そうした例は兎と山猫の關係があるが、兎が増えすぎると山猫が食べる。すると兎は減って山猫は増えるのであるが、兎は絶滅するということはない。なぜなら兎の数が減り、山猫が増えると、今度は山猫は餌を探すのが難しくなり、減少し始める。するとまた兎が増えだし、遂にはもとに戻る。こうして動物界は増えれば減り、減れば増えして、その数が上下しながら、結局お互いの一定の数を保存維持しあっているのである。

こういう考え方は今日喧しい生態学エコロジーの理論と同じである。生態学においては自然は一枚の縫い目のない織物のごとく相互連関しあっているものとされ、その連関を都市とか産業の人為によって切断するところに、環境破壊による深刻な公害問題が起きるとされる。解決は、もう一度自然連関を呼び戻すことではない。こうした考え方を山岸は、とうに昭和二十八年以前に持っていたのである。

のみならず山岸の卓見と偉大さはそうした自然認識を自然界から、人間と自然、人間と人間の間にまで延長応用（徹底化）したところにある。養鶏と農業との間に、相互共存關係をつくったのもそれである。「共生共活」、つまり「自（ことに）他を活かす」——これが、山岸の自然界の認識から得た生活的信条であつた。他を活かすとは、生きている命を徹底して大事にすることでもあつた。何ごとに依らず、森羅万象すべてについてである。

例えば人間に害をなす蛇、蠅といえども殺しはしなかったのも道理といえる。仮に殺したなら、それをもう一度活かすべく、蠅の餌にくれてやった。植物といえども同じである。山芋の芽はつんで土に活かし、人の捨てそうなくずみかんを自分が活かすべく食べる。彼はそうした態度を「私はケチでし

てねエ」といいながら、ひょうひょうと貫いていた。

戦時中、彼は海軍へ卵を納めるという名目で餌をもらって裏の池で家鴨を飼い、魚の調理残しといえども、腸を切り刻んで池に投げ込み、魚の餌にしていたというが、生活万般にわたって己れの理論である活かすを実践していた。

まして人間においておやである。どんなに能力の低い者、腕力の不足している者といえども活かされねばならない。例え不具、精薄者といえども必ずそれなりの活きる道がある。世間的には脱落者とみられている乞食、娼婦でも社会に活かすことができる。いや、山岸の描く未来社会では、乞食、娼婦すら活かされるというよりは、むしろこの社会の主役を演ずることもできるのである。

なぜならそこに実践とは対極的に思想の問題があり、もう一度「自然は一枚の縫い目のない織物」に戻らねばならないのであるが、もし自然というものがそのように相互連関しあったものだとするれば、「万物一体」ということになる。どこにも切れ目はなく、自然・人間みな一つになっているのと同じである。

それは例えば、今自分が着ている一枚の衣服のことを思ってみるだけでも、全世界とつながっていることがわかるはずである。上衣が自分の手に渡るまでの過程を遡ってみれば、恐らくは何百という段階を経て、遂に木綿ならばエジプトかアメリカの農場にまで至るであろうし、毛織物ならばおおかたはオーストラリアの牧場に至るはずである。同様に砂糖は台湾・キューバ、豆腐、味噌は中国、コーヒーは中南米、香辛料はインド・インドネシアと食糧においても同じである。

存在はあくまでも全体の中の部分であり、手や足はそれぞれ機能的に独立しながら、誰もそれらが総体としての肉体の一部であることを疑わないはずである。各個が互いに助けあって初めて総体をな

している。

とすればどんなものも、それ自身に属するというものはないことになる。またそれ自身では存立しえないことになる。問題がここまで押しつまってくれば、結局世の中には「所有」というものはないことになるし、近代人の錦の御旗とされている「自我」などというものも存在しないことになる。

よくよく考えてみれば、「所有」（わがもの）も「自我」（わが考え）もありえないのが、この世の真実態である。

反対にいうなら、世界には無所有と無自我があるといえはあるのみである。この無所有と無自我の人間の象徴が、乞食であり、娼婦ということになる。彼らは家、財産を持たず、自己の肉体に執拗にこだわることもない。そこに無所有一体、無我執世界を目指す山岸とすれば、未来人間の粗像（モデル）を透視していた。故に彼らは「理想郷実現の貴重な一役、或いは主役を演ずることも出来ます」（『実態』）と書いたのである。

しかし山岸会の発足を前にして、活動家たちにはそこまでは打ち明けなかった。話がそこに至るとあまり高度にして、飛躍し過ぎるからである。

その後初期運動においても「われ、ひとと共に繁栄せん」の「共存共栄」||「共生共活」がずっと中心スローガンになっていったようである。その手本を、山岸は終始生活の中でみせていった。暗黙の教育である（無所有一体、無我執は段階を追って公表されていた）。もつとも日常的な「共存共栄」||「共生共活」を称えていさえすれば、それがいわば全体（根本）を動かす鎖の一環（会旨という「判定」）であるから、それで充分だったのである。

さて、山岸式養鶏普及会と同時に本命の山岸会が発足したものの、最初の間はまったく養鶏一辺倒のような会であった。会する人の殆どは、革命的だと噂される山岸式養鶏を習いにくるのが目当てであって、現在の山岸会とは想像もつかぬ原始的な会であった。

大体、山岸会と山岸式養鶏普及会の区別がつかないのである。山岸会が発足と同時に毎月十六日を定例会日として、月例会（その当時は研鑽会ということばはなかった）が開かれていたのであるが、多く会場として利用されていたのは向日町の公民館で、その入口の机の上には、青と白の二種の紙が数十枚重ねて積んであった。青い方は山岸会の説明書。白い方の紙は中央にミシン線を入れて紙面を二つにわけてあり、右片は山岸会入会申込み、左片は山岸式養鶏申込みの用紙になっていた。初めての入会者はこの紙に記入して受付に渡すのであるが、大抵は左片のみにしか記入しない。

すると受付はすぐさまつき返して、「これにも書き入れて下さい」と右片を指す。「私は養鶏会だけに入会したいのですが……」と相手が不審と不満をまじえた眼差しで問い返すと、型にはまったように、「山岸会に入会しないと養鶏会には入れんのですから……そう規約に決まっているんです」と受付は答えていた。そして入会者がいや応なしに、諦め顔で右片の紙にも住所氏名を書き入れて差し出すと、ニマリしてこれを受理する——といった具合だったのである。

この十六日の定例会は発足三年目に「特講」が開かれて発展的解消するまで、開かれつづけた。通知は最初から案内状や通知広告によらず、参会者の口頭によっていた。これが慣例となって、以後山

岸会は本部といわず地方会、支部に至るまで日時、召集の方法はこれに倣った。会員はその日を予め生活予定の中に組み入れておき、他にどんな用件があってもそれに先んじて出かけたものである。しかし先にもいうように、初期は殆ど養鶏会の趣が濃厚である。本部でのやり方は午前中は会員の鶏舎見学、午後は講演、質疑応答などであったが、そこで話される大半の内容は養鶏技術に関するものであった。

ところが二年目を迎えた三月の定例会で山岸は初めて、会報創刊号（二九・四・一刊）に載せるべき「万象悉く流れ、移り行く。……今や地軸を動かす事態が発生しつつあるのであります」に始まる「獣性より人間性へ」の原稿を演題として読んだ。この文章は自分でもいうように社会通念から飛び離れているのと、表現不足によってなかなか判じ難いものであったが、それでも会員には爆弾的宣言の役割を果たした。何といっても、会員はいうに及ばず、世間一般でも「山岸会は鶏の会だ」と思っていたのであるから……。そこで一参加者が、

「この際思い切って、先生の抱いておられる精神を端的に発表して欲しいものです」

と息をはずませて迫ると、山岸は、

「それこそ私の今したくてたまらんことなのですが、しかし、それをやれば私の身辺が危い。そのため折角の山岸会の現状が崩壊するにしのびないのです」

と淡々とした中に、重大な意味を含めたいらしい決意を漂わせながら、答えたのである。帰り際、参会者の中のインテリ風の一婦人がつかつかとこの発言者の傍へ寄ってきて、耳もとでささやくように「私は西宮から来たのですが、この会は養鶏を表に出して、実は何か恐ろしい思想を宣伝するようだと感じられるのですが……」といって去った。そしてその後この婦人は二、三度定例会

に出席したのみで、姿を見せなくなってしまった。

一部にこうした例を含みつつも、山岸会はあたかも燎原の火のごとく燃え広がっていった。数年ならずして会の支部は、全国各県に存在せざるはなしというほどまでに拡大された。山岸を初めとする会員活動家の努力にも依るが、何と云っても時代がよかったのである。山岸自身もやがて鶏肉、卵の溢れる時期を見越して、拡大するのは絶対量不足の今が機会だと精神的に急いだのである。

当時山岸式養鶏をとった（とっている）人の数は、回想記を書いている人の文章（会誌「ポロと水」「メーボール」かばくひろし）によると莫大なもので、恐らくは数十万人は超えるだろうとしている。（現在昭和三十一年以降の「特講」受講生約三万人、山岸会直接参画者千余人）

この爆発的ともいえる急激な拡大を見越してか、山岸は会発足に当って、歯車の中に赤いハートを配したバッジをつくり、裏面にナンバーを刻印した。そのナンバーたるや、A1に始まりA1グループが十万人に達すると、次のA2グループに移る。こうしてAaのaが十万になればBグループに入る。するとAグループは十万人の十万倍であるから百億人、アルファベットを二十六倍すると、Zグループまで全部で二千六百億人の数になるように仕組んであった。

これはべらぼうな数だが、それでも人類の永続性からすると限りがある。その限りある人類のなるべく早い時期に、このバッジも山岸会も不要になる世界が必ず到来する。その日の一日も早く来たらんことをという意味が、このナンバーにこめられていたのである。

ところで運動の主導者となった山岸であるが、主導者でありながら本人自身は会祖としての意識はなかった。会祖の意識がないばかりか、運動家の意識もなかった。それは会発足の年の七月に普及会を改称して、「山岸式養鶏会」となった時の発言でわかることであるが、かばくひろしが立席して、

「会則にはなぜ山岸先生の位置を明記してないのですか。会として体をなすためには是非、先生を総裁とか何とかの地位に置くべきだと思うのですが……」

と質問すると、山岸はその間に答えるべく立上がつてテーブルに両手をつき、やや細いが澄んだ力強い声でいった。

「私は山岸会の一会員としての位置で結構なんです。実をいうと私としては二、三年の間にこの会から退きたいと思っていますのです」

この答えを聞いて質問した当人は実に意外であったとしているが、それはそうであろう。折角かつぎだした御大が、運動を続ける気がないらしいのであるから。

「会員の願いとしては、是非現在の地位を続けていただきたいもの……」
と要請するのみで引きさがつた。

では山岸は運動の見通しをつけて何を行なわんとしていたのか？ それは著作である。具体的には『月界への通路』の完成である。自分が生涯かけての思索を書き遺さんとする、それが自分の唯一本願であり、そのためにこそ自分の生が必要と思っていた。著作仕事こそ自分の病気がちな体軀と、孤独内省的な性格にふさわしい天性の生活である。つまりその他の仕事は、例え養鶏、運動といえども業余のものであるか、自分の持ち味にそぐわぬものでしかなかった。

山岸已代蔵のそうした終始念願する基本的な生き方を承知していないと、大正十一年郷里へ戻って養鶏を始めたこと、戦中というのに養鶏組合を辞したこと、戦後に単純労働の農業をやリだしたこと、三十余年も野に伏していられたこと、執拗無残なまでに福里ニワを追いかけたこと、折角の百万羽養鶏（三重県春日）を去って再び戻らなかったこと、等々の意味が掴めないだろう。